

日蓮の平和論

小林正博

日蓮仏教への共感

現在、日本で最も多くの人に信奉されている宗教は、十三世紀に出現した日蓮の仏教である。日蓮信奉者にとって、日蓮は生きる上での希望と勇気を与えてくれる人生の師である。日蓮は、すぐれた思想家、哲学者というにとどまらず、むしろ宗教者として、実践者として、強烈な影響力を与えて人々を魅了してやまない存在なのである。

日蓮は信念の人であった。日蓮は大乗仏教の經典の

中で、法華經を最高の經典と位置づけ、その法華經の經題である妙法蓮華經への帰依を説き、南無妙法蓮華經と唱えることを修行の根本においた。そして唱題行によって人々は苦悩から解放され、人生に輝きをもたらすと確信し、その流通に生涯を賭けたのである。

しかし、日蓮の主張は、国家の宗教政策、民衆支配のあり方を批判するものと受け取られた。宗教界からも非難の嵐がうずまいた。そのため日蓮の人生は弾圧の連続であった。襲撃されること四度、流罪は二度に及び、ついには死刑台に上ったこともあった。しかし、

日蓮はそのすべての危機を乗り越えていったのである。たとえどんなに大きな壁にぶつかろうが、かならず乗り越えていくという強靱な生命力と、事実の上で乗り越えたという勝利の人生が、多くの人々に共感の輪を拡げているのである。

その日蓮について、世界詩歌協会のクリシュナ・スリニバサ会長は次のように謳っている。

日蓮の仏法は世界宗教として
今日輝き亘っている

この普遍性は、

平和と繁栄を得るための個人における信念と
すべての国の文化的伝統と

人間に対する偉業に
脈打って流れている

今、日蓮の仏法はSGIとして世界一九〇カ国に広がり、その指導者である池田大作会長も世界の著名人との平和実現のための対話行動を重ね、世界宗教として多くの人が認めるところになっている。スリニバサ

博士的的を射、深い洞察が込められたこの詩の一節に触れたとき、私は日蓮の生き方を多くの方々に伝えることに大きな意義があることを認識できた。インド最高の文化人が日蓮を高く評価していることに心から感謝申し上げたい。

『立正安国論』提出の真意

日蓮が歴史の舞台に登場したのは、時の最高権力者に対し、来るべき災難の勃発を警告し、安穩の世の実現の方途を指し示す『立正安国論』という著述の提出によってである。時に一二六〇年、日本は軍事政権たる武家が支配する中世に突入していた時代であり、日蓮、満三八歳の時であった。奇しくもガンジーが南アフリカでサティアグラハ闘争を開始したのも三八歳の時であった。

日蓮は『立正安国論』の冒頭で、漢詩風に次のようにつづった。

「天変地天　飢饉疫癘　遍滿天下　広迸地上
牛馬斃巷　骸骨充路　招死之輩　既超大半

不悲之族 敢無一人」

「天変地天・飢饉疫病・遍く天下に満ち広く地上に迸る牛馬巷に斃れ骸骨路に充てり死を招くの輩既に大半に超え悲まざるの族敢て一人も無し」(一七頁・二〇九頁)と。

この漢字で四文字十句からなるリズムカルな言い回しは、何度も練りに練って作り上げた日蓮の詩的表現であった。しかし、この詩が歌い上げているものは、情緒的でも感傷的でもない、同情でもない、現実に広がる民衆の惨状そのものであった。

日蓮は政都・鎌倉で、この地獄の様相を目の当たりにしたのである。日蓮が平時を破る状況を体験したのは戦争ではなく災害であった。甚大な被害をもたらす地震、大風、大雨などの自然災害、二次災害的な疫病、飢饉、火災、さらには不吉な天変は、災害弱者である民衆の生活と人生を破綻させるにあまりあるものであった。

日蓮はこの衝撃的な惨状を直接体験し、仏教者としてこれを黙視することは許されないことを痛感してい

た。そして民衆救済のため、やむにやまれぬ行動にで

た。為政者への諫暁に敢然と立ち上がったのである。

日蓮は自らが言うように、「海人が子」(『本尊問答抄』三七〇頁・一五八〇頁)「民が子」(『中興入道消息』一三三二頁・一七二四頁)であった。庶民階層から出た無名の一

仏教僧にすぎなかったのである。その日蓮を民衆の安穩実現に突き動かしたのは法華経であった。法華経の「現世安穩後生善処」(葉草諭品)の文や「一切衆生を化して皆仏道に入らしむ」(方便品)ほか多出する「一切衆生」の表現に基づき、日蓮は民衆の代弁者として立ち上がった。いや代弁者というより、一切衆生の異の苦をわが苦ととらえる仏教の菩薩として、だれに頼まれたでもない、どこまでも自発的に利他に徹する菩薩の使命を果たすため、戦いを開始したというべきであろう。庶民一人一人が幸福で安穩な人生を歩む生存の権利を持ち、それを脅かす者に対しては敢然と戦うというのが、仏教者・日蓮の実践の人生哲学だったのである。

その庶民の生命が危ない。屍が累々とする鎌倉の惨

状を通して、日蓮は命の大切さを痛感していた。「いのちと申す物は一切の財の中に第一の財なり」（二五九六頁・二二六一頁）という日蓮は、庶民の命を守るために自らの命を顧みず、時の権力者に対し、民衆不在の政治姿勢を問う『立正安国論』を著わしたのである。

『立正安国論』の内容は主人と客の十問九答の構成によって客の嘆きから始まり客の決意で終わっている。客の憂いは同時に主人の憂いでもある。主人は「独り此の事を愁いて胸臆に憤排す客来つて共に嘆く」（二七頁・二二〇頁）と言い、客は「余独り嘆くのみならず衆皆悲む」（同頁）と言う。主人も客も「安穩の危機」については共通の認識に立っていることが明らかである。たとえ最高権力者と名もない一介の僧という社会的な立場が違おうとも、信仰を異にし宗教的立場が相反していようとも、「安穩」を願う共通の意識があれば対話は必ず成立する。日蓮が『立正安国論』で、仏教者と為政者の対話によって民衆の安穩の道を探るという形式に仕上げたのは、対話のもつ力を十分に認識していたからである。安穩つまり現代の言葉で置き換えられ

ば「平和」と「平和の実現」について語り合おうというのが『立正安国論』の出発点であった。

日蓮の対話路線に説得力があるのは、民衆に視点を置いたところにある。民衆を支配する相手に、民衆の安穩を最優先するよう啓蒙しているのである。「民衆の安穩」という普遍的視点に立てば、いかなる社会的、国家的課題でも、さらには地球的規模の諸問題でさえ、対話の道は拓かれることを日蓮は『立正安国論』で示してくれているのである。

そして『立正安国論』では、内乱（自界叛逆難）と外寇（他国侵逼難）の二難を予見し、権力者に警鐘を鳴らしている。日蓮は災難に言及する経典を読破し、既出と未出の災難を整理し、未出の二難を見出し、必出の予見として位置づけたのである。二難はいずれも合戦すなわち戦争を意味している。うち続く災異の上に戦争が起これば、自然の災害にも人為的な災難にも無力な民衆は壊滅し、それによって必然的に国そのものも滅ぶという予見の警鐘は、日蓮が反戦論者であることが明示するものである。

理想の政治家像

前述したように冒頭第一段の漢詩風の表現は、客（権力者・北条時頼）の発言である。このことは「安穩」への責任を担うのは、為政者自身に課せられた使命であることを雄弁に物語っている。

日蓮は折々に、あるべき為政者（政治家）像に言及する。膨大な著作から抽出すれば、日蓮の期待する政治家像は以下のようなものである。

一に道義的人格者であること

二に民衆本位であること

一については、

①うそをつかない（「王と申すは不妄語の人」五八七頁・

一八四八頁）

②福德がある（「福德の王臣」三五二頁・一三二五頁）

③讒言にまどわされない（「国主は…諸人の讒言を・を

さめて一人の余をすて給う」一五二四頁・八九〇頁）

④両方の意見を聞け（「王両方を聞あきらめて」一四二二

頁・一五六一頁）

⑤理を親とし非を敵とせよ（「国主は理を親とし非を敵とすべき」一五二四頁・八九〇頁）

⑥身を滅ぼしても虚事をしない（「賢王となりぬれば・たとひ身をほろぼせどもそら事せず」一五二九頁・一三七頁）

二については、

①臣下よりも人をたすけ（「国王は臣下よりも人をたすくる人」九頁・一九六頁）

②民衆のなげきを知れ（「国主と成つて民衆の歎きを知らざる」三六頁・八九頁）

③子細を聞け（「国主ならば子細を聞き給うべき」三五七頁・一三三四頁）

④万民の手足たれ（「万民の手足為り」一七一頁・四二八頁）

⑤仏法によつて人民の心をつかめる（「仏教のかしこきによつて人民の心をつくはしくあかせるなり」一四六五頁・一一二八頁）

もちろんこれらの文言は、その時の背景、前後の脈絡も踏まえる必要があるが、ここでは政治を担当する

者への日蓮の要求が多岐に亘っていることがわかっていただければよいと思う。

政治と宗教の目的は「民の安穩」で一致

現実の為政に対する深い関心を生涯持ち続けていることを窺わせるものであり、それはそのまま日蓮の特質にもなっている。政治のありようは直接人々の生活に影響をもたらす。為政者の姿勢如何が民衆の幸・不幸を大きく左右する。日蓮は「一人まつり事をだやかならざれば万民苦をなすがごとし」（真蹟断簡、なし・二四九四頁）と為政者の影響力を強く認識している。民衆の安穩を第一義に考える日蓮であるからこそ政治の動向を見据え、監視の目を光らせていくことを、必然的な行為としてとらえるのである。

政治と宗教を比較する場合、人の不幸の外的要因を取り除くのが政治の役割であり、内的要因を取り除くのが宗教の使命という位置づけが可能である。内的要因は、自分自身の心のありかたを直視し、信仰による安穩の獲得が図られるが、外的要因の除去については

為政者の善政によって解決されることも多い。特に現実の災禍に喘ぐ人々にとって緊要なのは日常生活の維持である。それを満たす上で政治の責務はまことに大きい。日蓮が為政に対して多言しているのは、それだけ政治の影響力の大きさを深く認識していたからに他ならない。日蓮の中では政治と宗教の目的は、民の安穩という一点において完全に一致しているのである。

日蓮は「戦う平和主義者」

また日蓮は日本の歴史における数々の戦争に言及し、戦争の悲惨さを強調してやまない。その場合、犠牲者や敗者を中心に論じるのが日蓮の戦争観の特質でもある。特に蒙古という世界最大の大帝国との争いの様相を次のように記している。

「日蓮が申す事は愚なる者の申す事なれば用ひず、されども去る文永十一年〔太歳甲戌〕十月に蒙古国より筑紫によせて有りし固対馬の者かためて有りしに・宗総馬尉逃ければ百姓等は男をば或は殺し或は生取にし・女をば或は取り集めて手をと通をして船に結い付

け・或は生け取にす・一人も助かる者なし、壹岐によせても又是くの如し」(二三二頁・九九五頁)とある。

また蒙古に対しては、仏教の立場から、隣国の聖人(二二七二頁・四五四頁、三五二頁・一三二五頁、一四一一頁・一五六〇頁)と位置づけ、蒙古は仏が梵天・帝釈に仰せつけて日本を攻めている(二三〇二頁・一二九二頁)、また、蒙古の賢王の身に仏・菩薩・諸天が入って日本の国主を罰している(三六二頁・一三四二頁)といふのである。

日本の為政者から見れば侵略者である蒙古に対して、日蓮は、侵略する側、される側、攻撃か防衛か、どちらが勝つか負けるかというような政治的次元で二国間の戦争をとらえるのではなく、戦争が与える民衆の惨劇を深く憂うるのである。どこまでも日蓮の視線の先には民衆がいたのである。

日蓮はいうまでもなく、自らが武器を所持したこと、それを用いたことも一度もない。ある時、武士である門下の一人が師・日蓮の命を案じて刀を送ったことがある。そのとき日蓮は次のように語っている。「殿

の御もちの時は悪の刀・今仏前へまいりぬれば善の刀なるべし」(二三二七頁・八〇六頁)と。日蓮は、人の命を奪う殺生の道具としての武器は悪だと断じている。

日蓮はもちろん当時の僧兵のように帯刀していたことは生涯ない。日蓮の所持する武器は、刀ではなく法華経だったのである。「なにの兵法よりも法華経の兵法をもちひ給うべし：兵法劍形の大事も此の妙法より出でたり、ふかく信心をとり給へ、あへて臆病にては叶うべからず候」(一一九二―三頁・一六八五頁)という。臆する心のない信仰にまさる武器はないという仏教者の面目躍如たる表現といえよう。

事実、日蓮は法華経という兵法たもを持ち、行じ、身で読むことによつて数々の大難を乗り越え、その生涯を全うした。まさに、日蓮は民衆原点の法華経の精神を行動の指針に据え、民衆の安穩のために走り抜いた「戦う平和主義者」だったのである。

現代日本においても、また世界においても、日蓮の戦う平和主義は十分な価値を持つていと確信してやまない。

付記

本文中、日蓮の文章の引用にあたり、二種類の文書集の頁を並記した。前者が『日蓮大聖人御書全集』の頁、後者が『昭和定本日蓮聖人遺文』の頁を表す。

また引用文は漢文体もすべて読み下している。『日蓮大聖人御書全集』の文章を採った。『日蓮大聖人御書全集』にない文章は『昭和定本日蓮聖人遺文』を引用し、漢文体のものは読み下した。

(こばやし まさひろ／東洋哲学研究所主任研究員)